はじめに　変転する関係に触発される

モザンビーク島は不思議な場所だ。調査のために日本から島に戻るたび、対岸の大陸部から島に続く三キロメートルの一車線の橋を車で渡るあいだ、ひとつの小さな世界に帰ってきたのだという気持ちになる。島の空間と時間のリズムは、国じゅうでほかにない。車は、橋の途中にいくつかある待避所で対向車と待ち合わせながらゆっくりと進む。この不便な橋は、島という小さく完結する時間と空間へ通じる装置のようにさえ思える。小さな島はそれだけ明確な輪郭を持ち、よそとは異なる特徴を備えている。

かつてはポルトガル領東アフリカの中心拠点として栄えたせわしない島だったが、今では時間も現金も漁業を中心にゆっくりとまわる。過去の栄華の面影を、ポルトガルの様式も混淆した色とりどりで華やかな石造りの建物に残しつつも、景観は同時に古びて朽ちた質感を帯びる。居住地区は一見スラムのように過密なのに、おそらく国じゅうのどこよりも治安がいい。ほかの都市や町ではスマートフォンを手にしたまま歩くなど昼間でもできないが、島なら夜中に女性一人で歩いても少しも不安を感じない。それは島民にとっても同様で、子どもたちも夜遅くまで路上を走りまわって遊ぶ。彼らは、どういうわけかほかの都市や農村部の子どもたちよりも人懐こい。島には、その小さな域内で完結する独特の穏やかさや安心感、確かさがあり、海風と沿うように凪いだ時間が流

松井梓『海と路地のリズム、女たち：モザンビーク島の切れては繋がる近所づきあい』
（春風社、2024 年）

れる。
だが、身近な誰かを非難するあけすけなゴシップが濃密に飛び交い、緊張や摩擦と親密さを大きく行き来する女性たちの関係は、そんな穏やかに凪いで見える島のなかで繰り広げられるのだ。言い換えれば、女性たちのなかにいると不安定に両極を行き来するように見える、局所的に見れば混沌とした島の社会は、全体としては安定感をたたえて見える。調査を始めた頃、素朴に実感をもって抱いた違和感だった。

*

この小さな島の居住地区に人びとは稠密（ちゅうみつ）に住まい、女性たちは友人や隣人どうし親密につきあう。ときに身体を近づけあって相手に触れては親しさを確認し、秘密を打ち明けることで心を近づけあう。近隣の家を頻繁に行き来し、半開きの勝手口から声をかけて入っていっては、その家の女性とお喋りやゴシップに興じつつ隣人たちの台所事情も覗いていく。そこで相手に食べるものがないとみれば、自分が作った料理を皿に盛って相手の家に届けたりもする。
だが、女性たちの親密さの印象が強く残った一度目の調査の約一年後、島を二度目に訪れたときに気がついたのは、滞在先の家の妻ドナ・マリアモのもとを訪れる顔ぶれがすっかり変わってしまっていたことだった。食べるものがないときに頼る相手や皿に盛った料理をやり取りしあう相手も、その後も調査のたびに変わっていった。一年前には何度も勝手口から現れてお喋りや借り物をし、あれだけ親しげに連れだって夕暮れ時の散歩に出かけて行った裏口に住むドナ・セルーはもう家を訪れない。表口側の女性との料理のやり取りもぱったり途絶えていた。代わって、近隣に越してきた別の女性が頻繁に家を訪れるようになり、彼女とのあいだで親密な打ち明け話や食べ物のやり取りが始まっていた。この近所づきあいの変転は、その次の年にも見られた。たとえば日本の女子中

高生の教室内での関係が移り変わることに似ているような気もしたが、はっきりとしたグループ化や派閥化、強い連帯感のようなものが見られるわけでもなく、関係はよりドライに流動していく。

島の女性たちの近所づきあいには、身体を近づけ秘密を打ち明けあい、おせっかいに食べ物をやり取りしあうような親密さを求める身構えと、その関係の終わりを淡々と見送るドライな身構えが併存している。そして、一度途切れた近所づきあいは、しばらく時間をおいて再開される。女性たちの関係は、固定的で永続的な互助関係が見られるアフリカ農村部の近隣関係とも、もっと匿名性や移動性、流動性が高い大都市周縁部の隣人関係とも少しずつ異なるが、そのどちらの特徴も併せ持つ。双方の特徴が混ざりあうなかで、親密で煩わしい関係のなかにも、それが固着しすぎない風通しが生まれていた。このバランスはどこから生まれるのだろう。

ほかにも違和感があった。島のゴシップはどこよりも酷いと女性たちみずから語るほど、至近に住む隣人たちのあいだではあけすけなゴシップが行きかう。ゴシップの話題は、隣人に手持ちがなく何も食べていないことや誰かが食べ物を乞うてきたこと（それらを言いふらされるのは島民にとってとても恥ずかしいことである）、秘密として打ち明けられたはずの話題や悩み、よく知っている夫婦の関係のもつれ、誰かの振舞いへの非難など、生活に結びついた様々なことだ。女性たちは、まるで舞台に立った演者のように、芝居がかった抑揚のある調子で誰かについての話を始める。その態度には、他人をあざけったり、非難したり、相手に嫉妬するような含みがある。ゴシップは多くの場合ターゲットの耳にも入り、近所で誰が誰を悪く言っているのかは皆よく知っている。女性たちは、島のゴシップの煩わしさと腹立たしさに心底辟易し、うんざりしたように語る。にもかかわらず、女性たちのあいだには摩擦が生まれはしても関係がひどく険悪になることはない。徒党を組んで誰かを爪はじきにするわけでもないし、誰かとの関係が完全に断たれてしまうわけでも、ゴシップのターゲットの評判や信頼が決定的に損なわれるわけでもない。彼女たちは、目の前を濃密に飛び交うゴシップの渦中で、関係を悪化させすぎずに緊密に共在しているのだった。

彼女たちの繋がりは質・量ともに過剰に見えたし、関係の近づけ方も切り離す仕方も、日本での女性どうしのやり方よりも強度のあるあからさまなものに思えた。女性たちも他人の目や評価は気にするし、悪く言われれば傷つく。だが、過剰で濃密な繋がりのなかでも、互いをコントロールしあったり自他の境界を緩めすぎたりしてしまうのではなく、どこか他者を手放す態度があった。そのバランスは、私たちのそれからは絶妙にずれ、異なっていた。繋がりはより近く強いが、切断はドライだった。

*

島で暮らしていると、まるで島という巨大なゆりかごに揺られながら生を営んでいるような感覚に駆られる。そこでは、環境の作用のなかで多くのことが決まっていった。南北約三キロメートル、東西五〇〇メートルほどの狭小さだからこそ、島の環境が住まう人びとに作用する動態が目に見えてわかる。海に囲まれた漁業頼みの、多くの人が魚を現金で購入しなければならない島では、嵐の季節になり不漁が続けばたちどころに現金がまわらなくなり、世帯ひとつひとつの暮らしが立ちゆかなくなる。天候の変動と漁獲の多寡は、その日誰かに乞わなければならないのか、貸した金銭が返ってくるのか、隣人と皿に盛った料理を交換できるのかを決めていく。植民地期の都市計画によって過密に建てられた家々のあいだに路地が張り巡らされ、人びとはそこを小刻みに縫うように行きかう。すっかり雇用が失われたこんにちの島では、そうする時間はたっぷりとある。路地を歩き回るなかで誰かに声をかけ、またかけられ、誰かのかまどの火がついているのが見える。見えてしまえばとても気になる。食べ物のやり取りやゴシップはこうして生まれる。ここにいれば、誰かと否応なく近づいてしまうし、摩擦もどうしようもなく生まれる。近所づきあいの親密さと緊張、それが弛緩する波のリズムは、まさにこの空間配置と時間のリズムのなかで具体的に生まれ変転していた。

＊

本書は一貫して、島という場に触発されて筆者に立ち現れたこうした「感覚」の源泉となる事象のひとつひとつを、どうにか記述することを試みている。そして、この記述をつうじて本書が目指すのは、女性たちの関係の親密化と緊張の波や、濃密ながらも風とおしのよい島の近所づきあいが、いかに成り立っているのかを示すことだ。それは、序章の後半で触れるマリノフスキの「現実の生の不可量部分」を、具体的な語りや事例、データを用いて（不可量なものをときに定量化さえしながら）可能な限り記述する試みとも言える。

まずは、島が置かれた環境と絡みあいながら女性たちの近所づきあいのリズムが生まれていく動態を、ひとつひとつ記述していく。海のリズムや天候のリズムが生む生計の波。かつては栄えた都市が産業を失い都市的漁村となった歴史の経緯、その結果、過密しているにもかかわらず間延びした時間が流れること。女性たちをよその家へと自在に向かわせる張り巡らされた路地、そこで右へ左へと小刻みに促される歩み、この空間配置と絡みあってうまれるつきあいの変転のリズム。この空間を構築した植民地期の統治のための都市計画、稠密に配置された家々、複数の家族での共住を可能にする住居、過密を生んだ独立後の経緯。至近に共在するツンとしたプライドの高い女性たち、そうしたプライドの源泉。そしてこれらひとつひとつを生んできた、島が経てきた必ずしも連続的ではない歴史の過程。本書では、関係の浮き沈みとの直接的な因果関係が不明瞭な、島の社会関係の潜在的な地層にある要素まで含めて捉える。これらに触発され、ときに否応なく絡めとられて人びとのあいだに関わりあう喜びや相互行為が生まれ、関係の親密化と緊張、その弛緩のリズムも生まれていく。そしてそれは、島という小さな世界で完結する時空間なのである。まずはこの島というゆりかごに揺さぶられる感覚に、できうるかぎり読者をいざない、そうして生まれる近所づきあいを記述していく。近所づきあいもその関係の変転も、程度の

差はあれどこにでもある現象だ。そうであれば、それらの事例との比較をつうじて島の事例を特徴づけることを目的にするよりも、島の女性たちの近所づきあいやその変転の程度を細やかに記述するとともに、その場の歴史や環境のどのような作用のなかで現在のつきあいのあり方が生まれるに至ったのかを記述することに意義があるであろう。

そのうえで、島というゆりかごの揺さぶりや隣人との繋がりからいくつもの仕方でみずからを切り離す、〈個〉としての女性たちの姿を描く。女性たちは、隣人とごく近い距離で、情緒的な距離も寄せつつ頻繁に関わりあうが、どこかさっぱりと自他を切り離す身構えも併せ持つ。否応なく生成され変転し続ける情動的な繋がりを受け流し、相手にみずからを委ねすぎない女性たちの身構えがいかなるものかを捉えたい。

白状すれば筆者の関心の根本は、この島と女性たちについて記述することにしかない。これはもちろん筆者の力量不足によるものでもあり、またこうした記述の仕方には批判の余地も大いにあるが、一貫した理論的な枠組みや分析手法に島や女性たちをあてはめることや、議論の新規性を見出すことに魅力を感じなかった。加えて、島の事例は、何らかの地域研究の文脈に位置づけて比較をおこなうにはあまりに小さく限定された時空間のなかで起こる現象だった。

それよりも、モザンビーク島というひとつの場所の、そこを揺さぶる環境の作用や、女性たちの関係や対他的な距離や振る舞いにおける「われわれ」の感覚との少しのずれ、それがどのように生じ、島の社会や個人の生がいかに成り立つのかに強く興味をひかれた。それを記述するためにもっとも有効なのは、島の女性たちと筆者自身の暮らしのなかに現れた島の時空間、関係の動態やリズム、女性たちの他者に近づきつつもさらりと切り離す対他的距離のバランス、そのほか様々な「こまごまとしたこと」［マリノフスキ 2010: 56］――すなわち、人びとや筆者に立ち現れたイメージ［箭内 2018］をひとつひとつフィールドデータから立ち上げなおし、民族誌を記述することだと考えた。したがって、序章でおこなう文献のレビューも、通常の民族誌・学術書の作法のように筆者の事例を

位置づけて筆者自身の主張を提示するためというよりもむしろ、島を記述するために依拠する議論を島の様子に沿うように示しているのに近い。だが、記述的な序章の議論をとおして、繋がり（あるいはそれに関する議論）に絡めとられることとそこから切り離すこと（に関する議論）のあいだで行き来し、揺らぎ、ときに引き裂かれる女性たちのあり方を、疑似的に体験してもらうことができればと思う。

私は、女性たちの関係のあいだでときに途方に暮れた。だが、みずからへのゴシップを流布する隣人たちの家々のあいだを縫う狭い路地を、胸を張り肩を揺らして歩く女性たちの姿にナイーブにも魅了されてもいた。

本書は、島の環境や他者を含めた濃密な関わりあいに身を浸しながら、そこにいくつものやり方で切り込みを入れていく女性たちの、半径二〇メートルの日常で繰り広げられる実践を描く民族誌である。日本は繋がりが希薄だといわれる。だが、もしかすると私たちに欠けているのは、繋がりつつも切り離すことの巧みさなのかもしれない。本書をつうじて、そんなことを考えていけたらと思う。

海と路地のリズム、女たち——モザンビーク島の切れては繋がる近所づきあい

目次

はじめに　変転する関係に触発される　……　1

序章　繋がることと切り離すこと　……　18

1　繋がること　……　19
2　切り離すこと　……　23
3　アフリカ的〈個〉　……　28
4　本書の視座　……　33
5　調査概要　……　35

朝　……　41

第一章　モザンビーク島という舞台――環境、歴史、社会、女性　……　48

1　スワヒリ海岸の南端、モザンビーク海峡の北端　……　48

2　モザンビーク島の歴史　……　60
3　人口の移出入史と、マクア・ナハラという「民族」　……　68
4　マクアとナハラの社会、その変容　……　76
5　女に住まわれる島　……　83
6　おわりに　……　88

昼　……　95

第二章　居住空間の形成史、空間の特徴と近所づきあいのリズム　……　100

1　空間と人との相互作用　……　100
2　今日のバイロの空間構造　……　106
3　居住空間の構築と、統治と保全の歴史　……　108
4　スワヒリ様式の住居　……　125
5　空間の時間性と社会関係のリズム　……　132
6　統治と参与の空間を非連続に架橋する　……　144

コラム：路地を自在に選んで歩く …… 150

第三章　海がもたらす時間性——変動と確実性のリズム …… 152

1　島の経済と人びとの生計 …… 153
2　島の漁業 …… 154
3　農作物はどこから来るのか …… 165
4　島の料理、調達方法、食べ物のやり取り …… 170
5　漁獲の波と生計の波——海がもたらす変動と確実性のリズム …… 178
6　生計の波と食のやり取り …… 183
7　海のリズムと近所づきあいのリズム …… 189

晩 …… 192

第四章　誰と住まい、誰と食べるか——住居内での食のやり取り　……196
1　住まうことと食べること　……196
2　共住と住居内での食の授受の概要　……200
3　非親族との共住と食のやり取り　……214
4　おわりに　……227
第五章　濃密な関わりあいとその変転——親密さと摩擦を行き来する　……232
1　親密さと摩擦、コミュニズムと交換　……232
2　バイロの近所づきあいの濃密さと流動性　……238
3　親密さ、緊張とその解消のなかで共在する〈個〉　……261
4　おわりに　……268

第六章　ゴシップの渦中で共在する　……272
1　ゴシップとはなにか　……272
2　小さな島のゴシップ　……276
3　共在の社会空間　……284
4　みずからを他者に委ねすぎない身構え　……286
5　ゴシップの渦中で共在する　……296

終章　受け流すこと、委ねすぎないこと　……302
1　前章までの要約　……303
2　〈あいだ〉の集合性の次元からの切断　……308
3　絡みあうリズムと切断のあわい　……314
4　〈個〉としてある女性たち　……316

あとがき……318
参考文献……vi
索引……i